

して常盤会寄宿舎の監督も引き受けていた。この寄宿舎は、松山出身の学生のために旧藩主久松家が設立したものだ。

明治二十四年、役人生活に嫌気がさした鳴雪は、文部省を辞任して寄宿舎の監督に専念することになった。寄宿生の一人が、本格的に俳句を作り始めていた正岡子規であった。

「廿五年の年始に私は二つばかり俳句が出来て、それを子規氏に見せたら、これはなかなか好い」とって誉めてく

れた。それから私は暇ではあるし、いよいよ俳句を遣って見ようという気になって、作れば作るほど熱心の度を増した。」

かくて、二十歳年下の子規を師として、四十六歳の俳人鳴雪が誕生するのである。俳人としての鳴雪は、いつしか子規派の長老的立場となり、「万朝報」「読売新聞」など多数の新聞・雑誌の選者となる。だがその活動の中心は、何といっても明治三十年に松山で創刊された「ホトトギス」であった。

子規亡きあとの鳴雪は、明治四十年、常盤会寄宿舎監督を辞任。俳句選者ひとすじの生活に入る。後任の監督は秋山好古であった。

自叙伝には、大正七年、鳴雪の古稀を祝う句碑が道後公園に建立されるまでが、その時代背景とともに生き生きと描かれている。俳壇の長老の回顧録にとどまらず、幕末から明治、大正を生き抜いた一人の人間の記録としても、価値ある作品といえよう。

『鳴雪自叙伝』は、はじめ沼波瓊音の雑誌「俳味」に連載され、大正十一年に東京の岡村書店から刊行された。私は、昭和五十一年に松山の青葉図書が復刊したものを愛蔵し、折に触れて読んできた。本書が、このほど初版から八十年ぶりに岩波文庫の一冊として刊行され、多くの人に読まれるようになったことを喜ぶたいと思う。

いけうち・けいこ 元愛媛放送機取締役。現在(株)パームクリエイティブ顧問。放送批評懇談会会員。俳句雑誌「春耕」同人会長。



鳴雪の古稀を壽いで有志が道後公園に建立した句碑。
句は「元日や一系の天子不二の山 鳴雪」。